

川村学園女子大学研究紀要 第12巻 第3号 119頁—130頁 2001年

人文科学的視点からの環境論 (1) ——今道友信『エコエティカ』に寄せて——

湯 浅 弘*

An Essay (1) on 'Environment' from Imamichi's Cultural Point of View in *Eco-ethica*

Hiroshi YUASA

Abstract

本論文は、今道友信の『エコエティカ』を現代における人文科学的な環境論の一典型として読み解く試みである。今道の基本的な視点は、20世紀における人間環境の激変が人間のあり方の変容をももたらしたと見るもので、環境の変容に応じて生じた倫理の空洞化に対して倫理学の再構築を試みようとするものである。今道の見るところ、20世紀において人間環境が激変したのは、自然環境に加えて科学技術の所産としての技術連関が人間環境の重要な構成契機として登場したためである。技術連関が主要な環境となったことによって人間は倫理意識なき技能動物と化しつつあるのではないか。それゆえに、人間が現に住まう場所（オイコス）の変容を見据えた新たな倫理学、すなわちエコエティカが要請されているのではないか。このような問題意識にしたがって今道は人間のエコロジカルな変容の諸相を分析しているが、本論文は、その分析を辿りながら人間のあり方に焦点を当てた人文科学的な環境論の基本的な構えを浮かび上がらせようとするものである。

キーワード：エコエティカ、オイコス、技能動物化、技術連関、倫理の復権

1 はじめに

人口問題や資源エネルギー問題等々関連する他の困難な問題と同様、環境問題が、おそらくは今後なお数十年にわたって人類が格闘し続かなければならない現実的な課題となりつつあるこ

* 助教授 人間学・哲学

とは、今日ではあらためて確認するまでもない事柄である。ミクロには、例えば日常的なゴミ処理をめぐって問題化されてきたダイオキシンによる健康被害、原子力関連産業の運営のあり方をめぐって問題化されてきた周辺住民への放射能汚染の可能性等々、地域的に限定されているとはいえ夥しい数の個別的な環境問題が山積している。また、マクロにはフロンガスによるオゾン層の破壊、また、主として二酸化炭素ガスの大量排出に起因するとされる地球温暖化問題等、地球環境全体に関わる環境問題がある。

それらの多くが、関連する人間の生活条件、あるいは生存条件に関わる問題として早急に現実的な対応策を必要としている問題であり、環境問題の特徴の一つは、何らかの形でその解決策が緊急に提示されねばならないという点にある。だが、他方、環境問題が、政治、経済、科学技術等々の諸システムの相互作用の帰結として生じてきた複雑な構造を持つ問題であることも言うまでもなく、環境問題は、その真の問題解決に近づくためには多様な観点からの考察の蓄積を必要としているという性格をも同時に併せ持っている。現今の環境問題が持つこうした二つの性格、あるいは現今の環境問題の解決に課せられたこれら二つの要求は、明らかに或るディレンマを形成している。つまり、それは出来る限り早い解決策の提示とその実現という要求を最優先に考えれば拙速な対応策しか現実化されないかも知れず、かといってその要求を度外視すれば、現にある環境の状態から具体的に被害を受けている人々の声を少なくとも差し当たりは無視せざるを得ない、といったディレンマである。

多くの個別的な環境問題において現にそうであるように、このようなディレンマに直面した場合——被害の発生が具体的に確認される場合にはとりわけ——当事者間での現実的な解決策の模索が当然優先されねばならないであろう、と筆者にも思われる。だが、仮にそうした模索の結果として当事者間で解決策に関する何らかの合意が得られたとしても、そうした解決が暫定的なものでしかないことも同様に明らかであろう。通例、当該の環境問題に関わる当事者同士の間に関心、利害、態度、意見の不一致が抜き難くある限り、そうした解決の多くが当事者間の妥協点の探索の結果としての政治技術的な解決にとどまるというのが実状だと思われるからである⁽¹⁾。

既に触れたように、現今の環境問題が具体的な解決策の実現を早急に要求する性格のものである以上、いかに暫定的とはいえ、個々の環境問題において具体的な解決を見ること自体が望ましいのは言うまでもない。だが、専らこうした次元でのみ環境問題の対自化がなされるとすれば、環境というテーマをめぐって考究されるべき他の本質的諸相は、具体的な環境問題の個別性・緊急性によって覆い隠され、等閑視されると見なければならぬだろう。そもそも人間にとって環境とはどのような意味を持つものなのか、言い換えれば、人間と環境とはどのような

な関係に立つと見られるべきなのか？また、人間にとって望ましい環境を想定するとして、それはどのような要件を備えたものなのか？そして、以上のような問いへの解答があるとすれば、どのような道筋でその解答へと到達し得るのか？等々。抽象的ではあるものの環境というテーマを考える上で欠き得ないこうした問いは、主として自然環境の劣悪化を念頭に置いて、個体としてであれ種としてであれ人間の生活条件、生存条件を——ただし、場合によっては人間以外の他の生物種の生存条件が問題になることもあるが——いかに確保するかという問題に狭く限定されて主題化されている現今の多くの議論においては、背景に押しやられているように思われる。

本論文は、以上のような状況認識に基づいて、人文科学的視点から環境というテーマにまつわる問題を捉え直し、このテーマをめぐる現今の議論の欠落を補おうとする試みの一つである。人文科学的視点とここで筆者が言うのは、差し当たり、自らの思考の痕跡を言語化して遺した——ただし、言語を媒体としない芸術作品といったものまで考慮すれば、必ずしも既成の言語における言語化とは異なるコードによる作品をも含めなければならないだろうが——先人のテキストから現在においてなお生かし得る知恵を汲み取ろうとする視点総体の謂いである。人文科学の領域で環境というテーマに関わる最も代表的なテキストとして、筆者としては、和辻哲郎の風土論（『風土』1935年）とハイデガーの技術論（『技術と転回』1962年）を念頭に置いている。だが、これら両者について本格的に論じるのはいずれ別の機会に譲るとして、まず本論文では、現代日本の哲学者今道友信の『エコエティカ』を取り上げ、その基本的論点を浮かび上がらせてみたいと思う。『エコエティカ』は、現代の人文科学的視点からの環境論の典型と見なし得るが、同時にそれは、上記のようにやや古いものとはいえより原理的な思考を示している和辻やハイデガーのテキストへの格好の橋渡しの役割を担い得るテキストだと思われるからである。

2 「エコエティカ」の基本的構想

「エコエティカ」とは、「エコ」および「エティカ」という言葉の原義に忠実に解釈すれば、人間の住まう場所に関わり、その変化を強く意識した上で人間存在のあり方、また行為の仕方といった根源的な問題を主題化する倫理学と解される⁽²⁾。今道自身はそれを「人類の生息圏の規模で考える倫理」(p. 17)⁽³⁾あるいは「人類の生息圏全体にわたる倫理学」(p. 18)と言い、その構想は1960年代中葉にまで遡れるものと述懐している。(p. 3)

1960年代という時点では現代の地球環境問題のようなグローバルな環境問題は顕在化して

おらず、「人類の生息圏全体」を視野に入れた倫理、あるいは倫理学と言っても、その構想は、おそらく予感のようなものとして胚胎したと見るのが妥当だと思われる。だが、その時代に少なくとも先進国において人間環境の激変が生じたことは事実で、「エコエティカ」の構想が、人間を取り巻く環境の激変という現実を踏まえた倫理学再構築の構想としてはきわめて早い時期に属するものであったことは疑い得ない。

その時代に生起した人間環境の変容のうちすぐさま思い起こされるのは、例えば、河川の水質汚濁や大気汚染、また農薬散布による生態系の攪乱といった自然環境の破壊という現象であろう。様々な要因による自然環境の劣悪化が問題視され始めたのは、確かにその時代においてであった。シンボリックな例を挙げれば、現代では自然保護運動のバイブルのように言われることもあるレーチェル・カーソンの『沈黙の春』がアメリカで出版されたのは1962年であるし、また、日本社会で様々な自然破壊が公害という奇妙な名前でジャーナリズムに頻繁に登場するようになったのも、同じく1960年代のことである。今道による「エコエティカ」の構想の背景に、自然環境に対する過度の、あるいは不適切な人為的介入の帰結としての自然環境の劣悪化という同時代の現実があったことは容易に推測されるところである。現に今道自身も、自然物に対する責任、あるいは将来の世代に良好な自然環境を遺す責任等々、自然環境との関係において人間存在のあり方、または行為の仕方といった問題を問い直そうとする視点を明確に示していると言ってよい。

今道のこうした視点は、現在、環境倫理学（environmental ethics）と総称される応用倫理学の一分野における基本的な論点と大筋において重なるものであり、自然環境の保護あるいは保全をめぐる現今の議論を先取りするものではある。だが、自然物に対する責任にせよ将来世代に対する責任にせよ、自然環境の保護あるいは保全に関する今道の指摘はごく常識的な指摘で、「エコエティカ」の構想の重要性がこうした論点の提示にあると見るのは妥当ではない。人間を取り巻く環境の激変と言っても、今道の「エコエティカ」の場合、その構想に強く関わるのは、第一義的にはいわゆる自然破壊という現象ではなく、日常生活全般への技術的産物の浸透の結果として今世紀に出現した（主として先進国において認められる）人間の住まう場所の様相の変化だからである。今道は、言わば、人間が他の動物と直接に対峙していた最古の時代以来という長いタイム・スパンで人類史の変遷を見据えながら、近現代の科学技術の進展がもたらした人間の生きる場のドラスティックな変容を、その変容と相即するかのよう生じた人間性自体の変容と併せて倫理の問題として主題化していたのであって、今道が自らの学的構想を「エコエティカ」という名称に託した理由もそうした点にあると見ることができる。そうした消息は、「現代技術の根本問題」と題されて、1984年に行われたシンポジウムでの次のよ

うな今道の発言からも窺える。

人間の環境が自然だけであった時代とそれが技術と文化によって多層化されている現代とでは、自ら人間の生活状態がちがっているということは当然でございます。すなわち人間のエコロジカルな状態がちがうので、そこにおけるエティカもちがってきはいないか、というのがエコ・エティカ提唱の最初からの問いでございました。・・(中略)・・別の言葉でいえば、エティカ・イン・フィジカすなわち自然における倫理ではなくて、技術を環境としてみなければならない状況のなかで倫理をあらたに考えなおす必要があるのではないかというふうなことが問題になるのでございます。それでレジュメに書いたように、「技術を道具として見ないで環境としてとらえる」という考え方が必要ではないかと思っております⁽⁴⁾。

技術とは、最も一般的に言えば、何らかの目的を達成するための方策、手段の総体であり、自然環境であれ既存の人為的環境であれ、人間の住まう場所としての環境を改変する力となるものである。その意味では、技術それ自体は人間の道具であって、むしろもともとは人間の環境ではない。だが、技術を行使した帰結として新たな人間環境が生起することも言うまでもなく、ここで今道は技術を行使した帰結に注目して、現代では自然物の他に技術の所産をも環境として捉える必要性があることを指摘しているわけである。

日常生活への技術的産物の浸透が個別的・散発的な現象にとどまっていた時代にこのような指摘が為されることは稀であったし、仮にそうした指摘があったとしても、それがさほどのリアリティを持ち得たとは思えない。だが、科学技術の進展によって多種多様な技術的産物が大量に普及するばかりでなく、個々の技術的産物を結び付けて作動する様々な形の大規模技術システムが出現した現代にあっては、技術を環境として捉えるという今道の観点それ自体の妥当性は、誰もが認めざるを得ないと思われる。典型的には交通システムあるいは通信システムといった、現在なお高度化と複雑化の過程にある技術システムを想起すれば明らかなように、先進国に住まう現代人にとってこうした科学技術の所産が自然環境と並んで、場合によっては自然環境以上に重要な意味を持つ環境となったことは、見紛う余地のないところであろう。

以上のように、「エコエティカ」が定位しているのは、主として科学技術の所産からなる人工的な環境である。今道は、これを「技術連関」(p. 5, 33)と命名したうえで、自然環境に加えて技術連関もが人間環境の重要な構成契機となったという人間の住まう場所(エコ)の変化、すなわち「人間のエコロジカルな変化」(p. 46)を問題にしているわけである。既に若干触れたように、また先の引用で今道自身が「人間のエコロジカルな状態がちがうので、そこにおけ

るエティカもちがってきはないか、というのがエコ・エティカ提唱の最初からの問いでございました。」と述べていたように、その考察の焦点は、「人間のエコロジカルな変化」が人間性にどのような変化をもたらしたか、またそのような状況下でどのような倫理学が要請されるか、これら二点にある。

これら二つの問いは、むろん相連関する問いである。また、究極的には、後者こそが主題化されねばならない枢要な問いであると筆者にも思われる。だが、後者については『エコエティカ』で十分な説得力をもって論じられているようには思われない。この意味では『エコエティカ』は、いまだ問題提起、ないしはマニフェストにとどまると見た方がよい側面を持っている。後者の問いも含めて今道のその問題提起自体は重要だと筆者にも思われるのだが、以上のような事情から次節では主として前者の問いに焦点を当てて今道の所論の検討を続けていきたいと思う。

3 技術連関という環境のなかでの人間

自然環境に加えて技術連関もが環境となったとき、人間の行為の仕方や存在の仕方、あるいは人間性といったものに対してどのような変化の圧力が加えられることになるのか？あらためて言うまでもなく、これは「人間のエコロジカルな変化」と人間性の変容との関係を問う今道にとって基本的な問いであった。

だが、2001年という現在の時点での我々の日常を省みれば明らかな通り、この問いは、現在においてなお未決の問い、ヨリ正確には現在においていよいよ明確に焦眉の課題となった感のある問いでもある。典型的にはパソコンや携帯電話の爆発的な普及に見られるように、繰り返して新たに生み出される科学技術の所産は日常生活の光景を変え、人々の生活様式を変え、おそらくは人それ自体の成り立ちを変え続けている。その変化の様相がどのようなものなのか？また、変化の末に帰着するのはどのような地点なのか？ますますスピードを速めているかに見える技術連関の高度化の渦中にある我々には、そうであるが故に逆に、こうした問いに対する確たる解答を見定めることができない。技術連関のさらなる高度化という、将来へ向けてなお進行中のこの出来事については、以上のような問いには試行錯誤的な解答を繰り返していく他ないと見るべきなのかもしれない。

このような事情は、むろん「エコエティカ」構想中の今道にとっても同様であった。したがって、今道が「エコエティカ」の構想で提示した議論も試行錯誤的な解答の一つでしかないと見ることもできる。しかも、それは、技術連関が環境となったと言っても、現代から見ればな

お素朴な段階にあった時代に構想された解答であり、あらためて言うまでもなくそれが時代的制約をまったく免れているというわけでもない。だが、電話、テープレコーダー、自動車、エレベーターといった、今では陳腐とも言える技術的産物を事例として取り上げる今道の議論が、現在なお読むに耐える議論となり得ていることも事実である。ヨリ正確に言えば、「エコエティカ」の構想時から現在への時間の経過によって、つまり技術連関の高度化という現実の動向によって、今道の議論はますます説得力を帯びてきているとすら筆者には思われる。

取り上げられている事例に目新しさが無いにも関わらず今道の議論が現在なお説得力を持っているのは、今道の議論の大筋が、その後新たに生み出された技術的産物、技術連関の新たな相、そしてそれに伴う人間性の変容の多くに同様に妥当するからだと考えられる。これは、言い換えれば、技術連関が高度化していく必然性、その過程で生じる人間の変化の方向性に関して、少なくとも現在までの現実の動向をカバーするだけの的確な洞察を今道が持っていたことを意味する。ヨリ強い表現を使えば、環境としての技術連関と人間との相互作用について今道はその本質的な契機を見抜いていたと言ってもよい。

では、具体的にはその洞察はどのようなものなのか？引用をまじえながらその概略を描いてみよう。

そう考えますと、身近なところに、エコエティカの問題はたくさんあると思います。
・・・(中略)・・・その身近なところから、倫理や道徳は生まれ、そこに生きているものであって、それゆえにこそ倫理がなくなれば、人間は身近なところから崩れ、本当に人間でなくなるだろう、技術連関の中で技能動物になってしまうだろう。環境に順応するだけで生きるというのは、動物のする仕事なのですから。人間は環境を変えていった。・・・(中略)・・・環境に負けずに、技術的に環境を変え、自然環境を越える努力をしてきました。それなのに、現代、こうして新しくできた技術連関という環境に対し、無抵抗に順応していくとするならば、人間はこれまでの環境を越えようとしてきた歴史に反逆し、人間らしさを失っていく。
(p. 75, 76)

自然の中で信号に反応して生きているのが動物で、人間は自然における信号的反応を拒否して、より高い世界を作ろうと考えて別の世界（技術連関の世界）を造った次第です。ところが、その技術連関の世界で人間がどう行動しているかという、ちょうど動物が自然の現象に反応して行動していたように、多くの場合、人間は技術連関の世界の中で動物的に反応して生きている。(p. 137)

これらは、他の動物にはなしえなかった技術連関という新たな環境の創造に纏わる逆説的な事態の指摘だと言ってよいだろう。人間は、技術的産物から成る技術連関を新たな環境として作り出すことによって、自然環境のみを環境とする不便さから逃れ、自然という与えられた環境に順応するだけの動物的な生活から逃れることができた。ところが、こうして創造された技術連関という新たな環境において、皮肉なことに人間は、技術的産物に対して信号的に反応する技能動物と化し、倫理や道徳、ひいては精神を荒廃させ、人間らしさを失いつつある、というのである。

この指摘は、一面では、人類史を文明の誕生以来という長いタイム・スパンで見た上で、現代における技術連関の登場を人類史上に位置付けようとする文明論的な洞察という性格を帯びている。だが、他方、技術連関という環境の中での現代人の日常への繊細な観察に基いた指摘でもあり、この両者が交叉したところで今道の議論は組み立てられていると言ってよい。上の引用では、技術連関を環境とするなかで個々の人間は、技術的産物に信号的に反応する技能動物であるかのような行動をする点に注意が喚起されていたが、今道は、技術連関の中での人間行動の変容を、さらに幾つかの視点から分節して描いている⁽⁵⁾。今道の言う人間性の変容の具体相を見るために、なお引用を続けてみよう。

これ（日本語訛りの英語の先生より、テープレコーダーに吹き込まれたネイティブ・スピーカーの英語の方が教育効果を上げられると考えること・・・説明湯浅）は機能の面で人間が機械に置き換えられるなら機械にしてもかまわないという考え、極端な言い方をすれば、人間が部品となって機能面だけで使われている、ということです。（p. 134）

会話のない部品（自動販売機・・・説明湯浅）との応対が行われているというのは、とりまなおさず、われわれが記号を介してものと付き合うところのものに化しつつある、と考えてみなければならない事態だと思います。（p. 135）

そういう社会（現代の都会・・・説明湯浅）での倫理は物体間の物理的調整に似ているのです。たとえば、東京のラッシュ・アワーのときなどには、電車へできるだけ大ぜい詰め込むように押す役がいたり、どんなに冷淡だと言われる人でも身体を伸ばして乗っています。それはちょうど、一つのトランクの中に物ができるだけたくさんはいる形に似ています・・・（中略）・・・人間の物体化としての自己疎外が、このようにして通勤という日常性の中で実現されていると、——この物体化としての自己疎外は自動車を運転して通勤する人の場合も、

つい今しがた述べた信号（交通信号・説明湯浅）への反応的盲従の連続においても同様だと思いますが——とにかく、このようであれば、自由の世界に生きるのではなく、恣意と必然の次元で動いているだけではないのか、と思われます。（p. 139, 140）

技術連関の中での人間の姿を「部品」「もの」「物体」といった比喩的表現によって描き出す以上のような文章から、今道が想定している人間の非人間化のおおよその輪郭は捉えられると思われる。技術連関を主たる環境とする現代人は、「部品」のように機能面でのみ使われ、「記号を介してものと付き合うところのもの」になりはて、トランクに詰め込まれる物のように「物体」として取り扱われている、というのである。いささかペシミスティックな観察ではあるが、現代人の日常の一断面が的確に切り取られていることは確かであろう。今道は、そうした観察に基いて、現代人の姿を「人間の物体化としての自己疎外」と捉え、技術連関の中で人間は「自由の世界に生きるのではなく、恣意と必然の次元で動いているだけではないのか」という疑義を提出していると言ってよい。

こうした指摘は、むしろ技能動物と化した人間という先の指摘と通底している。「もの」や「物体」にせよ「技能動物」にせよ、これらの措辞は、技術連関の中での人間の非人間化を暗示するために選ばれた比喩的表現である点で共通している。とすれば、ここで問われねばならないのは、今道にとって人間の非人間化の核心とは何か？また、技術連関という新たな環境の登場が人間の非人間化をどのようにしてもたらしたのか？さらには、人間の環境としての技術連関の成立と人間の非人間化との間には必然的な関係があるのかどうか？おおよそこういった問題だと言えるであろう。

まず第一の問いに関して言えば、今道の解答はきわめて明解だと言ってよい。「自由の世界」と「恣意と必然性の次元」というカント的な対置が暗に示しているように、今道にとって人間の非人間化の核心は、自由の座としての精神の働きの希薄化に求められている。『エコエティカ』の文脈に即して言えば、精神という言葉を使い換えて、こころや内面性の希薄化と言ってもよい。いずれにせよ、今道の洞察は、技術連関を環境とする現代人が、物理法則という「必然性の次元」において運動する「もの」や「物体」、あるいは「恣意」のままに動く「動物」に類似しているとすれば、現代人において精神、こころ、内面性といったものの働きの希薄化していると見なさざるを得ない、そして、そのような意味において明らかに人間の非人間化が進行している、というものであったと見ることができる。

技術連関の世界では一種の内面消去が行われているといえるでしょう。内面を消していっ

て、外側の技能だけで人を評価したり、また、実際に外側の技能が優れていなければ親切とか愛が実現できないような状況にある、ということも考えてみなければなりません。(p.132, 133)

精神、こころ、内面性といったものの働きの希薄化といった現象は、2001年の現時点では折りにふれて話題にのぼる現象であって、われわれの生活実感の一部に既に織り込まれている現象だと見ることもできる。その意味では、こうした指摘の内容それ自体に目新しさはないと言ってもよい。ただ、『エコエティカ』の場合独特なのは、現代人において精神、こころ、内面性といったものの希薄化が生じた理由、ないしは原因に関して日常的な生活実感を越えて語る視点——それは、言うまでもなく技術と人間の関係に関する哲学的な洞察に他ならないが——をそれが持ち得ている点である。今道は、技術連関の高度化が目指す方向性自体に精神、こころ、内面性といったものの働きの希薄化を引き起こす要因が潜んでいると見て、次のように言う。

科学技術による巨大な力が自明的な手段としてわれわれの手もとにいろいろな形である、という事実、そしてその既定の事実から、多くの成果を生んできました。そのうちの一つは何といっても、時間と労力を省いていくということです。わかりよい例はリフト、エレベーターです。ボタンを押すだけで、歩きもしないのに重い荷物を持ったままでも、何の疲れることもなしに、四十八階まで一分くらいで上がってしまいます。・・(中略)・・ですから、現代文明は、科学技術によってすばらしい成果をあげているのです。これは、経過、あるいはプロセスをできるだけ少なくして、結果を大きく獲得しようとすることです。私はこれを技術的抽象と呼ぶことにします。(p.150, 151)

とくに重要なことは、この技術的抽象は経過すなわち時間性を捨象するのですが、そもそも人間実存の本質としての意識は空間性ではなく、時間性ですから、技術的抽象が時間性を圧縮するということは、それが人間の本質を虚無化の方向に圧縮することになります。このことは決して看過すべきではありません。(p. 152)

現代における技術連関の高度化の際立った特性は、「経過、あるいはプロセスをできるだけ少なくして、結果を大きく獲得しようとする」「技術的抽象」にあるというのである。前者の引用に明らかなように、一方では、今道も「時間と労力を省いていく」科学技術の成果を、言

い換えれば技術連関の高度化に伴う「技術的抽象」の積極的意義を承認している。だが、他方、今道が高度化した技術連関のもとでの人間の非人間化の危険性を、根底的には時間性の捨象という現今の技術の特性に求めていることは、後者の引用に見られる通りである。精神、こころ、内面性の本質が時間性にある以上、「時間と労力を省いていく」ことを可能にする「技術的抽象」は、同時に、精神、こころ、内面性の働きの希薄化を招来し、「人間の本質を虚無化の方向に圧縮する」というわけである。

以上のように、技術連関という新たな環境の登場が人間の非人間化をどのようにしてもたらしめたのか？という問いに対しても、『エコエティカ』は一つの明解な解答を提示している。筆者にも、現今の技術連関の高度化の特性を「技術的抽象」に見る今道の指摘は妥当だと思われる。今道が指摘するように、「技術的抽象」によって駆動される技術連関の高度化は、人間に何らかの利便、快適さをもたらす。だが、技術は諸刃の刃であって、そうしてもたらされる利便性と快適さの裏面には人間の非人間化への危険性が隠されているかもしれないのである。この点を明確に指摘し、技術連関という新しい環境をめぐる問題の所在を明らかにした点に、『エコエティカ』の端的な意義は求められると言えるだろう。

ただ、「技術的抽象」が科学技術という営為の本質に属すかどうかは、それ自体独立して考察されるべき事柄だと思われる。「技術的抽象」が技術連関の高度化に不可避免的に伴うのかどうか、つまり、「技術的抽象」の行き過ぎをコントロールするような形での技術連関の形成が可能なのかどうかといった問題は、問いとしてなお残されている。既に瞥見してきたように、『エコエティカ』は、一方で技術連関という科学技術の産物のプラス面を承認するものであり、科学技術一般、技術文明一般の忌避ではない。したがって、『エコエティカ』の問題提起の延長上でこの問題はなお考えられる必要があると思われる。

また、あらためて言うまでもなく、現今の技術連関の高度化の中で人間の非人間化がなお進行しているとすれば、そうした現実を射程に入れて、人と人との間柄に関わる倫理は組み立て直されねばならないだろう。これは、『エコエティカ』の問題意識そのものであるが、なお今後の課題として残されている問題だと言ってよい。ともあれ、ここでは、技術連関を環境と見て、そこにおける人間のあり方に焦点を当てた『エコエティカ』の以上のような問題の地平をあらためて確認し、ひとまず筆を置くこととしたい。

注

(1) 環境問題のそうした政治的性格を顕著に示している典型例が、いまや国際政治における主要課題の一

つとなった感のある地球温暖化問題であろう。地球温暖化ガスの削減計画をめぐる国家間における政治的駆け引きの一端は、次のような一般向けの啓蒙書からも窺える。米本冒平、『地球環境問題とは何か』，岩波新書，1994年。

- (2) 「エコロジー (ecology)」 「エコノミー (economy)」 などの言葉の語頭でもある「エコ (eco)」は、ギリシャ語の「オイコス (oikos)」に由来するラテン語で、「家」「生息地」「生息圏」などを意味する。また「エティカ」は「倫理学」の意。
- (3) 本文中括弧でページ数のみ記してある場合には『エコエティカ』からの引用。以下の本文でも同様。
- (4) 日本倫理学会編、『日本倫理学会論集 20 技術と倫理』，以文社，1985年，P. 198.
- (5) 『エコエティカ』では、技術連関を環境とする現今の人間の非人間化，あるいは倫理の不在は，個々の次元だけではなく，人間集団，つまり組織の次元においても問題にされているが，後者の次元での議論は経済的な富の蓄積や政治的な権力の集中などとも絡む複雑な問題に関わる議論であって，必ずしも技術との関係でのみ扱い得るような問題ではない。組織の倫理的責任や，組織の意志決定の論理構造に関する今道の分析は示唆に富むが，以上のような理由から本論文では論究していない。

引用文献・参考文献

今道友信，『エコエティカ』，講談社学術文庫，1990年。

日本倫理学会編，『日本倫理学会論集 20 技術と倫理』，以文社，1985年。

米本冒平，『地球環境問題とは何か』，岩波新書，1994年。

レーチェル・カーソン，『沈黙の春』，新潮文庫，1974年。（Carson, Rachel: *Silent spring*, Houghton Mifflin, 1962.）

和辻哲郎，『和辻哲郎全集第八巻』，岩波書店，1962年。

Heidegger, Martin: *Die Technik und die Kehre*, Neske, 1962.